

『大内氏実録』を飛躍させた西日本中世史の名著

## 大内氏史研究

御蘭生翁甫著

マツノ書店

瑠璃光寺 五重塔

豊田氏 長門国豊田郡に盤踞せる豊田族の行動について考察するに、種長・種藤父子建武中興に功あり、その後、守護厚東氏に随つて足利尊氏を助けたが、必ずしも、厚東氏と終始一貫の行動を取ったものではない。足利直冬中国探題となり、ついで、九州に下つて尊氏と反撥するに及んで、直冬を扶けていたから、無二の北朝方たる厚東氏とは相反するに至つた。種長は正平七年十月十八日歿し、種藤嗣立した。墓銘・系図 ついで直冬九州に敗れて豊田氏に頼り遂に、肥後の菊池氏に通じ、帰順することになってから、直冬の旗幟いよいよ鮮明になって、これに従う豊田氏は南軍として厚東氏に対抗することとなり、また、周防の南軍大内弘世とは与国となり、軍事上の提携はますます緊密となつて厚東氏と対抗したわけである。然るに、正平十八年弘世は叛して北軍となり、これまで北軍であつた厚東氏は南軍となつたが、豊田氏が、乍ち、年来の敵であつた厚東と一緒になつて、弘世に当り、為に弘世に討滅されたとするは、早計であらう。言延覚書「長門国にては、厚東並に、豊田殿と申国人、周防にては、山口殿と申人、その外人体歴々候するを次第々々に被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>御存分<sub>二</sub>云々」とあるは、俗書中国治乱記と同説であつて、山口殿のことはこれを肯定する限りではないが、その「被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>御存分<sub>二</sub>」の語を「攻撃して滅した」と解釈するは当らない。近藤清石長門旧族誌を著わして、弘世の豊田氏を討つこと、「正平八年、九年、北朝の文和二年、三年の間なるべし」といえるは、前掲南北所屬を無視した暴説であり、かつ、周防には北軍が居り、厚東征伐にも着手していないという時代を眼中に置かない空言であるから、容易に耳を傾けるわけには行かない。なお、旧族誌には「周防の大内介弘世来り撃つ、某これと戦う。敗れて八道村に奔り、桃ノ木河内の山中に潜惹す。敵兵搜索し来り迫る。遂に自刺して死す。」と述べ、また、土人の伝説に豊田殿戦い負けて岩窟に潜惹せしに敵兵追い来りてふすべしかば烟に堪えずして、切腹せしかば豊田殿岩と名づけたというを載せ、結局それが、豊田殿自殺の証とされて、中国治乱記や言延覚書などを肯

## 第十一章 大内弘世の山口開府と城下町の機構

大内氏系図一本弘世の条に「始遷<sup>三</sup>吉敷郡山口<sup>二</sup>此地繁華起<sup>三</sup>于此代<sup>一</sup>山口祇園清水愛宕等建立<sup>三</sup>之統遷<sup>三</sup>帝都之構様<sup>一</sup>」とあり、弘世が始めて山口に遷ったことは相違ないが、これについて、少しく考究せねばならぬ。大内氏の本拠大内県の事は、予すでに、防長地名淵鑑に述べたが、東大寺文書に大内介知行領所として、矢田令・大内村・宇野令・宮野とあるによって、いよいよ大内氏根本の地が明白である。そこで大内氏は山口県内の大内村即ち御堀・氷上のあたりに館居したものと見られるが、矢田令<sup>ウケノ</sup>君城の地は注進案に、弘家の館址であろうかとある。弘家が矢田太郎と称し、この地真宗光円寺中に宝篋印塔一座があつて、その規模と形式は弘家の墓として首肯するに足るものであるから、或いは弘家が矢田令に館居したかも知れない。

大体において、大内村は大内氏居館の地で、貢租の収納所があつて、地方物資の集散地としての市庭<sup>いちば</sup>があつた。それがいわゆる大内市である。元応元年（二二九）防府宮市の兄部五郎太良が合物商売の長職に任せられ、東は富田市、西は嘉川市、北は大内並びに得地市を限り、合物商人等悉く、その成敗に従わしめたのも大内市が相当繁昌していたことを語るものであつた。<sup>兄弟部文書</sup>

さて弘世が始めて、山口に遷つたという山口市街の構成形態を考うるに、元来山口は宇努郷の地で、全部が平坦な農耕地であつた。そこに条里制が布かれて、縦横正交せる区画があつたのを利用し、旧面の線に沿うて都市を建設したのであつた。山口盆地に条里制が布かれたことは、土地の区画が比較的に正しく、諸所に坪の穂ノ木が遺つてい

るによつて知られる。

交通上から見れば、山陽道小郡から山陰に通ずる石州街道が縦通していた。それに、また、防府街道と佐々並・椿の街道が交叉して、道巾は狭いが、交通の要衝をなしていた。一ノ坂を下つた旅人は足をこの地に留めて休息し、防府からする者は鱧石で休むという風に、街道に沿う歴史的な自然発生の小商店が道路に沿うて出来ていた。山口の名は、萩市多越神社旧社坊円政寺所蔵建久六年（二一九五）の金鼓銘に「防州山口月輪山円政寺天神宮」と見えるから、その頃すでに、寺院も建立されており、今に山口には円政寺の町名を存している。

弘世が分国統治の中心をなすところの守護所を置こうとするに臨み、さすがに、天然形勝の山口盆地を見通すことなく、整然たる条里制の基盤に立つて、一ノ坂川河系の清冽なる天華地下水脈を利用し得べき宇野令の東辺今の菟福寺地域に宏壮なる衙門を建て、旧慣に従つて、濠と土居を繞らした。そして、これを中心として、一ノ坂川を挟んで、後河原から中河原にかけて、諸臣の住宅街を建設した。野田・宇野・鱧石等の如き在地領主にして、地名を以て氏とされているものの邸地を始め、他地域の在地領主たる高級武士の田屋を有つている者も、出屋敷を構え、その他の小分限の者も山口に住ましめ、日々出仕してそれぞれの任務に服せしめた。後年のことではあるが、右山口衆の内、小分限の者は、年中百ヶ日身暇を賜い、不時の暇は申請せしめ、無断密に帰郷し、或いは、他行すること上聞に達せば、十日に一貫文を過怠料として、寺社の修理料に寄せしめ、日限分際この負数を以て校量し、百ヶ日は十貫文と定め、若し、この成敗難渋の族は、恩給地を収公するの規定であつた。<sup>文明十七年壁書</sup> 後また、在山口衆、仮令一日たりとも、密に在宅の輩上聞に達したならば、後に御暇申請の場合取次ぐことなからしめ、重ねて密に在郷せしむる族は、永く御家人を放たれることとなつた。<sup>文明十八年壁書</sup> かような嚴制を布いたのは大内氏の領地が拡大され、臣隸が多くなつて政務が自然に複雑化した為でもあろうが、大内氏が、政治的軍事的に發展膨脹して、城下の住人が殖え兵農分離の趨勢を





# 大内氏研究に必携の書

山口県文書館専門研究員 和田 秀作

このたび、マツノ書店より御菌生翁甫先生の玉著『大内氏史研究』が復刻されることとなった。大内氏のお膝元に生まれ育ち、大内氏に興味を持つ者として喜ばしい限りである。

本書の特色の一つは、大内氏研究の先駆者である近藤清石翁の大著『大内氏実録』(以下『実録』)の不備を補い、かつそれを批判的に継承したところにある。

例えば、『実録』が取り扱っていない鎌倉時代以前の歴史を「前紀」という形で叙述し、全体の四〇%をこれに割いてある。また、『実録』の誤りを正した部分は明示してあるだけでも十数ヶ所以上に及んでいる。特に大内氏の継嗣問題と系図の正誤には重点が置かれている。

これらは、決して『実録』を貶めることが目的ではない。先生が自叙や例言で述べられた表現をお借りすれば、「実録が今日と違って史料の不備な時代の所産」であり、「史観においてその出発点を異にし」ているからである。したがって、結果的に「忌憚なく評論を加えたのも自然の勢いで、まことに已むを得ない」ものなのである。

ところで、本書は今から約四〇年前に上梓されたものであるから、どうしてもその後の研究の成果からすれば再検討すべき点も少なくない。さきほどの先生が『実録』を評価された表現でいえば、ちようど『実録』部分を本書におきかえたような状況である。それにもかかわらず、大内氏の総合的な著作としての本書の価値はいささかも変わっていないといつて良い。なぜならば、今日の大内氏に関する研究は、特定の分野での個別研究は深まっているものの、総合的な研究や通史はほとんどないに等しいからである。また逆に、その歴代の事績・文化・外交・職制などの分野で大枠は押さえられているものの、細部にわたると決して十分とはいえない状況にあるからである。

したがって、大内氏の研究を志そうとすれば、まず近藤翁の『実録』をよすがとし、次に本書で御菌生先生の学恩にあずからざるを得ない。そういった意味では、本書はまさに大内氏研究に必携の書といえよう。そして、本書が編まれた当時と比べて研究条件が格段に恵まれている今日、本書で扱われなかった政弘以降の大内氏の総合的な歴史を明らかにしてゆくことが先生の遺志を継ぐことになるのではないだろうか。



# 防長中世史の名著

山口県立大学大学院教授 國守 進

このたび、マツノ書店から御菌生翁甫先生の『大内氏史研究』が復刊されることとなった。初版が昭和三十四年、山口県地方史学会によって刊行されて早くも四十年余を経過したこと、また、刊行当時のことを思えば感慨深いものがあり、あらためて先生のこの御著の重みを思うことである。

当時、山口県地方史学会は先生のご指導のもと、活発な活動を始めたところ

## 目次

### 前紀

#### 第一編

- 一 大内氏の出自と多々良賜姓
- 二 多々良氏の始見
- 三 多々良氏の流罪赦免と抬頭
- 四 源平二氏の争覇

- ①源頼政の挙兵 ②源頼朝と木曾義仲の挙兵
- ③平重衡の南都焼討 ④木曾義仲の都入りと平家の西奔
- ⑤木曾義仲追討 ⑥範頼義経の一ノ谷合戦と平家の屋嶋落
- ⑦範頼の西下 ⑧義経の屋嶋攻略 ⑨源平壇浦の決戦
- ⑩範頼義経の末路

#### 第二編

- 五 神器帰還の計画
- 六 阿弥陀堂の建立
- 一 鎌倉幕府の創立
- 二 東大寺の再建と周防国受領

- ①東大寺大仏の鑄治 ②周防国受領と大仏殿再建
- ③俵乗坊の事蹟
- 三 国司と国領

- ①国防の国務管理と在庁官人 ②周防の国領
- ③法勝寺塔造営料国と感神院造営料国
- ④東大寺の再度周防国受領 ⑤周防国地頭の対押押妨
- ⑥長門の国司と地頭の押妨
- 四 鎌倉幕府の地方制度

- ①守護 第一款 周防の守護 第二款 長門の守護
- ②地頭 第一款 周防の地頭 第二款 長門の地頭
- 五 承久の乱と防長

- 六 蒙古の来襲と非御家人の武家化並その後の異国警固
- 七 周防留守所の紛糾と大内重弘

- 付 覚順房の国分二寺の再興
- 八 周防合物商売長職補任
- 九 幕府の疲弊と朝幕関係
- 十 防長の豪族

### 本紀

#### 第一編

- 一 建武中興の政治と大内裏造営の計画
- 二 中先代の乱と北条氏残党の長門盛山籠城
- 三 足利尊氏の叛と大内厚東二氏の向背
- ①尊氏直義の西奔 ②尊氏直義の東上
- ③南北両朝の分立
- 四 周防敷山城の義戦と大内弘直の忠死
- 付 上野頼兼の石見経略
- 五 その後の石見の形勢と防長
- 六 長門将士の河内国東条発向と四条畷の戦
- 七 屋代嶋義軍と伊予官軍の提携
- 八 天下三分の形勢と師直師泰誅伐
- 九 常陸親王の周防下向と大内弘世の帰順
- 十 周防守護の南北対立と大内弘世の統一
- 大内弘世の山口開府と城下町の機構
- 常陸親王のその後と芸石の形勢
- 三 長門守護厚東氏と九州の形勢
- 付 足利直冬の帰順
- 四 直冬の活躍と防長
- 五 直冬と山名時氏の連合
- 六 大内弘世の厚東征伐と九州探題の窮迫
- 七 弘世の叛と豊前の大敗
- 八 弘世の偽降と菊池氏の弘世討伐
- 九 大内弘世の入洛
- 十 大内弘世の芸石経略と石見国守護職補任並安芸国守護説
- 河野通堯の帰順と屋代嶋
- 弘世時代の弘世家中



『防長風土注進案』の刊行も始まったという状況であった。ただ、学会の機関誌「山口県地方史研究」の編集体制はまだ確立されていなかったため、大学卒業間もない私が、石川卓美先生から第四号の編集を仰せつかり、御菌生先生のご意見を伺いながら、私の発案で雑誌のタイトルを御菌生先生の題字に改め、かろうじて印刷にこぎつけたものであった。先生の『大内氏史研究』が刊行されたのはその前年のことであったから、第四号にまことに簡単な紹介をさせていただいた。先生の『大内氏史研究』は当時の学界でも注目するところで、私の紹介より早く、村井康彦氏が京都大学の「史林」(四三編三号)に紹介され、大内氏研究の代表的な業績として知られることになった。

従来の大内氏の研究では、先学の幾多の論稿はもろろのこと、新たに福尾猛市郎先生の『大内義隆』などもみられてはいたが、大内氏全般を包括する業績は乏しく、大内氏をみるには、とりあえず、近藤清石翁が明治十八年に著した『大内氏実録』(昭和四十九年、マツノ書店復刻)に頼らざるを得ないというのが実情であった。先生の『大内氏史研究』は、そうした隘路を切り開く意図をもって世に問われたものであって、大内氏の始祖に始まり、室町時代、教弘の時代までの大内氏の発展の過程を概説としてまとめられている。二十八代教弘以後、すなわち、二十九代政弘から三十一代義隆、そして滅亡に至る歴史の続刊が渴望されていたながら、実現しなかつたのはまことに残念なことではあった。しかしながら、こんにち、山口県文書館に収められている「御菌生翁甫文庫」のなかの丹念に筆写された史料集をみると、先生の『大内氏史研究』が、こうした史料の厳密な吟味のうえに成り立ったものであることを首肯せざるをえないのであって、山口県域を中心とする中世の歴史、あるいは「大内文化」を考えようとするとき、先ずひもとくべき書物として、末永く輝きを保ち続けることは間違いないと思うのである。



『大内氏史研究』の刊行にあたって

山口県地方史学会々長御菌生翁甫先生は、明治八年の出生で、本年八十四才の高齢である。もと造船関係の技術者で、長く逋信省海軍部に奉職せられたのであるが、つとに歴史に興味をもたれ、その在職中にも余暇をもって日本の造船史や、瀬戸内海水軍の研究に従い、かずかずの労作を発表されている。

しかして大正十三年退職後は、防長郷土史の闡明に専念され、透徹せる史眼と实地踏査に基づく精細な史実の吟味によって、従来の謬説を訂し、また新分野を開拓されたところが少なくない。特に大内氏については、明治前半における近藤清石氏の研究以後、ほとんど新しい見解の附加されるものがなかつたのを、先生はひろく根本史料を渉獵して、その究明に精力を集中し、大内氏の研究を数歩前進せしめた功績は大きい。また戦前『防長地名淵鑑』『防長造紙史研究』の如き大著があり、これらは防長郷土史研究の水準を示す不朽の名著というてよい。その他別項著述目録にも見られるように、既刊あるいは稿本で公開されている論考が甚だ多く、後学が今日もその恩恵に浴しているところは僅少ではないのである。

しかも昭和四年防長史談会設立に参画し、同十二年山口県史編纂所の開設されるや、その所員の一人として史料の採訪集取に尽され、また戦後昭和二十九年わが山口県地方史学会が結成されるに及び、衆望を担つ

て会長に就任されるなど、終始斯界の第一線に立って活躍されている。昭和三十六年山口県選奨規定によって学術文化功労者として表彰され、ついで同二十九年中国新聞社より中国文化賞授賞、更に翌三十年には防府市文化賞を受けられたのも、けだし当然といえる。先生はかねてから、その研究成果が多少なりとも学界に寄与すべきことを念願されて、その原稿を整理し、これを県立山口図書館に寄贈公開されているのであるが、今回また多年に亘って大成された『大内氏史研究』稿本を同図書館に納められた。平素先生の業績を景仰するわれわれ山口県地方史学会同人は、一方ではこの

労作が一般に触目の機会が少ないことを遺憾とし、他方現在なお壯者を凌ぐ意気をもって研究に精進せられる老先生への祝寿の贈物としての意をこめて、これが刊行を計画したのであるが、幸い小沢山口県知事、藤本山口県教育長、長嶋防府市長、毛利山口県地方史学会名誉会長の賛助と、本会々員の協力を得て、「御菌生翁甫先生祝寿記念大内氏史刊行会」を組織し、事業を遂行することができた。今回これが完成の運びに至ったことは、先生学徳の致すところであると共に、各方面の賛助協力の賜で、感謝の至りである。

なお本書記述の範囲は、大内氏全史の前篇ともいえるべく、先生はひきつづき続篇の成稿を期していただけるので、先生の筆硯ますます壮なることを祈ると共に、その公刊についても各位の一層の御支援を願うものである。

昭和三十四年九月

山口県地方史学会  
大内氏史刊行会

- 四 征西府の優勢と九州探題今川貞世の downward
- 五 探題軍の優勢と征西府の肥後退却
- 六 天授元年以後の九州の形勢と菊池氏の敗績
- 七 大内氏の神仏崇敬と臨濟禪の興隆
  - 第一節 大内氏の氏神氏寺
  - 第二節 大内氏臨濟宗の信仰と儒学の興隆
- 八 明使趙秩朱本の山口館待と五山詩僧春屋妙純
- 九 弘世と師弘の争戦
- 十 將軍義満の嚴嶋詣
- 十一 明德の乱と大内義弘の奮戦
- 十二 諸將の恩賞と義弘紀泉二州守護の加恩
- 十三 義弘の南北両朝御和睦の周旋

第二編

- 一 大内義弘の栄寵と歌道
- 二 大内義弘と朝鮮交渉
- 三 応永の乱
- 四 弘茂と盛見の対抗戦
- 五 師成親王と崇光院三ノ宮法泉寺方丈
- 六 盛見の始政と敬神崇祖
- 七 盛見の修禪と五山詩僧並大藏経の将来
- 八 盛見時代の大内氏家中
- 九 朝鮮の対馬来寇
- 十 宇佐宮造營と盛見の信仰
- 十一 九州三大族と大内氏の関係
- 十二 筑前の動乱と盛見の最後並持世の扶持決定
- 十三 大内氏の継嗣問題と持世の筑紫平定
- 十四 大内氏系図正誤
- 十五 永享六年以後の九州動乱
- 十六 大内持世の朝鮮交通
- 十七 赤松満祐の弑逆と持世の奇禍
- 十八 教弘の嗣立と満祐追討
- 十九 教弘の少式教頼討伐
- 二十 上杉憲実の入国と竹居正猷
- 二十一 伊与の動乱と大内教弘
- 二十二 付 觀之惠願

▼改めて申し上げるまでもなく、本書は大内氏の歴史や西日本中世史の研究に不可欠の名著です。山口県をより深く知るためにも、ぜひ座右にお備え下さい。

▼本書は上記の通り、昭和三十四年に御菌生翁甫先生の「祝寿記念」として山口県地方史学会から刊行されました。すぐ売り切れ入手困難になっていたので、昭和五十二年に小社で復刻しました。その後すでに二十四年、今回が二度目の復刻です。

▼最初の復刻版を出した当時まだ小社の歴史は浅く、不慣れのため、本書はケースが破れやすく、お客様の失笑を買ったかと思えます。今回は永年の保存に耐えるよう装丁にも意を尽くします。どうぞご期待下さい。

▼本書はあらゆる山口県郷土史の中でも最も必要度の大きい、いわば「定番」なので今回も限定版には致しません。なるべく特価でお求め下さい。

■体裁 A5判四五〇頁 上製貼箱入

■定價 一万円(税込・送料450円)

■特価 八千円( )

■三点セット特価 申込ハガキを  
ご覧下さい。

■特価締切 平成十三年三月末日

▼直販につき書店には御しません。  
分割・ポス払いに応じます。

徳山市銀座二の二三  
マツノ書店